KUSHIRO AGRICULTURAL COOPERRATIVE

釧路農協連通信

Kaketaka

カケタカ

September 2021

No.65

釧路農業協同組合連合会

公式Webアドレス

http://946nokyoren.or.jp/

幣舞橋・夏の像

販売家畜から利潤の格差を是正する！

酪農場から生産されるホルスタイン種（以下ホル）などの乳用種や交雑種（以下F1）等の雄子牛（以下♂）である初生牛は、早ければ生後1週間程度で家畜市場等に出荷され販売されます。

初生牛♂の市場相場は、比較的堅調に推移している状況にありますが、その個体販売価格に大きな格差が生じている現状にあり、初生牛の健康度や発育等のバラツキによる増体等の格差がその要因であることが指摘されています。酪農経営の利潤を左右する個体販売をより有利に展開するために副産物とされる初生牛♂を高評価に繋げる取組みも重視されるべきポイントとなります。

1. 家畜市場における初生牛♂の取引

釧路地区市場の1ヵ月の初生牛全体の上場頭数は概ね2，000頭。内約8割の1，600頭が初生牛♂の上場となっています。上場される初生牛♂の頭数割合は、ホル♂56．5％、F1♂36．7％と2畜種の頭数で大部分を占めていますが、近年は性選別精液の利用が増加し、性選別精液を使用して後継牛を確保する方向性が確立しつつあることから、乳用種の借り腹を活用した黒毛和種受精卵の産子が初生牛の段階で出荷・販売される頭数が微増傾向にあります。

取引価格については、ホル♂の相場は品薄傾向が続いていることや枝肉価格が堅調に推移していることが主要因とされ、F1♂の相場についても新型コロナ発生以降の外食不振に伴う枝肉価格の低迷や出回り頭数の増加を受けて、昨年10月には急落するも、その後価格は回復傾向にあり直近の7月相場は、多頭数が上場されるホル♂で平均110，751円／頭、F1♂で平均245，302円／頭となっています。しかし、販売価格に大きな格差（最高価格―最低価格）が生じており、ホル♂で220，990円／頭（最高：221，100円／最低：110円）、F1♂で370，700円／頭（最高：371，800円／最低：1，100円）の価格差がある現状です。

■初生牛♂上場頭数の推移

■初生牛♂上場頭数割合（R3.7）

■初生牛の販売価格の推移

(1) ホルスタイン種♂

(2)交雑種(♂)

＊データ提供：ホクレン釧路支所

初生牛として出荷・販売されます。

市場取引をみると高値取引される初生牛は、体重は主に50～60kgで比較的体幅に富み、毛づやが良く健康的な牛が高評価を受けています。飼養コストや労働コストから見ても、初生牛を早く大きくして出荷するに越したことはありませんが、現実的には初生牛を早く出荷できない生産側の事情がある場合があります。

例えば出荷前に病気に罹ってしまうことや思うように増体しない等、出荷・販売するまでのトラブルが生じることも少なくはありません。

短期間飼養で出荷・販売される初生牛をどう有利に販売するか、販売予定にある初生牛をトラブル無く、市場で高く評価を受ける牛に育成することは、販売格差を是正することになり農場の安定的な収益を生み出し、ひいては年間の農場の経営成果にも大きく貢献することに繋がります。

2. 短期間飼養で出荷・販売される初生牛

酪農経営の主業は、搾乳でありますが搾乳をするためには、子牛を生ませる必要があります。この時に生まれた子牛が将来搾乳牛にならないホル(♂)やF1のような場合は、殆どが生まれて間もない時期（生後1週間～2週間程度）に

3. 子牛を健康に育てるために酪農作業マニュアル「デーリィNavi」の活用を

乳用種の子牛は、健康に生まれて、健全な成育を遂げてこそ、酪農経営に貢献し乳用種として活躍する成牛となることは周知のとおりです。肉用種となる子牛も同様であり、健全な成育ができなければ、販売先の評価は高くなりにくくなります。現実的に初生牛の販売価格の格差も「子牛の哺育・育成管理」には依然として個々の現場において技術や作業の違いがあることも一因とされるでしょう。

昨年8月にホクレン・全酪連・釧路農協連の三者が共同制作をした酪農作業マニュアル「デーリィNavi」は、ほぼ全ての酪農場で共通する項目のアウトラインを整理し、それらの作業の標準的な手法、あるいは推奨される方法を纏めて、各農場の作業方法に応じて自由に書き換え可能な作業マニュアルとして利用することができます。

高品質な生産物を安定的に生産することは、家族経営やギガファームといった規模にかかわらず、生産過程に関与する作業をいかにスムースに行い、仕事の目的を効率的に達成し、ロスが発生しないようにコントロールし、酪農生産現場の生産性を高めるうえで重要になりますので、子牛の哺育・育成管理に是非「デーリィNavi」をお役立て下さい。

「デーリィNavi」の入手法

http://946nokyoren.or.jp/dairynavi/またはQRコード

データのダウンロードに際してはメルアド等の登録が必要となります。HPの冒頭に手順を記したPDFファイルがありますので、参考に進めてください。

4. 子牛の育成は反芻獣へのスムースな移行をアシスト

新生子牛へ必要な栄養源と免疫力を供給するための初乳給与、清潔な環境の提供、新鮮な空気、適度な保温、必要かつ十分なミルク（代用乳等）の給与など、高度な技術を用いなくても、基本に忠実に哺育・育成期の飼養を行うことによって、初生牛の成育が改善され、安定した個体販売価格にもつながり費用対効果の向上が期待できます。

子牛を育成する目的は順調な成育を促し、かつ反芻獣へのスムースな移行をアシスト（手助け）することです。哺育・育成期における疾病等のトラブル発生抑制や資産価値の高い高品質な子牛生産を安定的に行うためにも、先に述べた酪農作業マニュアル「デーリィNavi」を活用し、今一度見直してみることも有益でしょう。

黒毛和牛をもっと伸ばす

和牛飼養管理アドバイザーの農場巡回 パート1

今年度から道内の和牛生産先進地である白老町で和牛の飼養管理の指導や診療等をされている「さの・かーふさぽーと 代表 佐野公洋 氏」に管内の和牛生産農場を巡回してもらい、飼養管理に関するお悩み等現地で聞き取りをして改善するためのアドバイスを頂き先進地の和牛管理の知識を普及する取り組みを行っています。

農場の巡回や和牛飼養管理に関する研修会の開催など希望のある農協ごとに年に2回巡回を行いますが、第1回目の巡回が7月に行われました。そこで農場から挙げられた和牛管理についての質問とその課題となっている要因や改善アドバイスの説明を受けた農場から「和牛はそうなのか」「思い当たる」というリアクションがあった内容について紹介します。

さの・かーふさぽーと 代表 佐野 公洋 氏

プロフィール

1989年：酪農学園大学獣医学研究科修了
1989～2013年：サツラク農協札幌診療所、旭川診療所、胆振東農業共済組合、白老診療所勤務
いぶり農業共済組合、早来,伊達,白老各診療所　勤務
2013年：同組合退職　同年独立開業　白老町にて牛の小児科クリニック、さの・かーふさぽーとを開業する
日常診療業務の中で現在約20戸の農場、これまでに約１万頭の診療と飼養管理指導を行う。

■主な機関紙記事・論文著書の執筆
養牛の友：獣医が教える飼養管理教室、
「見直そう!黒毛和種の飼養管理」（シリーズ連載）
他多数

哺育管理❶ 哺育牛へのミルク給与量とスターター

農場主（質問）：自然哺育期間を1ヵ月間設けて2ヵ月齢目から子牛を親から離して今3ヵ月齢で6リットル給与する人工哺育管理をしてますがスターターを食べません。ミルクを減らして空腹にさせてスターターを食べさせるようにしたほうがいいですか？

佐野（アドバイス）：ミルクの量が足りていないことが要因と考えられます。和牛の子牛はミルクの量を満足しないとスターターを食べません。

農場主（質問）：えー!?ミルクを与える量が多すぎるからスターターを食べないと思っていました。ホルスタインとは異なるのですか？

佐野（アドバイス）：子牛の状態を見る限りミルクが足りていないようです。2ヵ月齢目の頃はもっと丸かったと思います。スターターを食べさせるためにミルクを控えることは逆効果になります。3ヵ月齢のこの子牛を見る限りミルクを4ℓ2回でも飲めるように見えますが、その量を与えて1度残すようなら3.5ℓ2回にするなどして調整しながらミルクを増やしてあげたほうがいいと思います。血液検査をしたらコレステロール100を切る栄養不足状態になっているかもしれません。哺育期間の子牛をぶくぶくに太らせるということではありませんが、哺乳期間の和牛の子牛は丸く毛づやが良い状態が本来あるべき姿です。

哺育管理❷
哺育牛への乾草給与

農場主（質問）：哺育牛の哺乳量を6ℓまで増やすことに躊躇しています。

佐野（アドバイス）：親子を分離してこのスペースに来てから下痢をする子牛がいるのではないでしょうか。全頭ではないとしてもいるとしたらそれは乾草の置きすぎが考えられます。

農場主：思い当たるところがあります！

佐野（アドバイス）：まだ全然ルーメンが発達していない月齢で乾草をお腹に入れてしまうと消化できずに下痢をします。その為、胃に乾草が残ったままになり消化不良を起こし下痢になってしまいます。和牛はホルスタインより未熟に生まれてくるようなものなので胃のルーメンが発達する2ヵ月齢頃までは草を口にしないようにします。恐らく分娩房で親が乾草を食べているのを見て、草を餌と認識してしまったので親の飼槽を高くする、あるいは哺育スペースへの移動を少し早める等、子牛に乾草を食べさせない対策が必要です。草が餌という認識のまま子牛を哺育スペースに移動してしまうとそこに乾草を置けば置く程どんどん食べてしまい子牛は草を消化することに体力を使って下痢も治まらずスターターも食べなくなってしまいます。今の子牛は日齢14日で通常の体格の子牛であれば3ℓ2回は飲めると思います。黒毛の哺育期間はホルと比べ増体が倍くらいあるため4ℓ2回でもいいほどですがそこまで飲めなくても現在の改良されて大きくなった和牛の子牛には3ℓ2回は必要と思います。但し乾草の給与を含め急に環境を切り替えることは良くないので次にこのスペースに入る子牛から変えてみてはどうでしょうか。

哺育管理ポイント

哺乳期間中はミルクの量に不足がないようにする。

- 和牛哺育牛の哺乳量は背中が尖っている等痩せているような状態であれば不足している。
- ミルクを多く飲むことでの下痢は獣医師の治療が必要な重症化にはなりにくい。
- 哺乳量が足りなければ乾草や敷料を食べてしまい、スターターを食べないことに繋がる。
- 離乳の理想・目標は体重130kg（ミルクを減らし始めるのは体重100kgから）の大きさでスターターを3kg食べられるようになったら離乳する。
- 130kgを越えずに離乳した場合体重が落ちてその期間のコストが無駄になるため、哺乳の段階で期間を短く増体させるほうが飼料コストの効率化ができる。

分娩前繁殖牛管理❶
繁殖牛を分娩前は痩せさせない

農場主（質問）：分娩前の管理をしようとして初産牛を1ヵ月前に分娩房へ移動させて管理していたが分娩2週間前に早産してしまった。その牛は太目だったため分娩の機会に品質の落ちる乾草を与えるなど少しでも痩せさせようとしたことは流産の要因だろうか？

佐野（アドバイス）：栄養が必要な時期に急激に栄養状態が悪くなっている状況のようですが、早産の原因のほとんどは母牛の栄養不足であるためその可能性は高いと思われます。分娩1ヵ月前は母牛を痩せさせる時期ではないため、胎児が急激に大きくなる前のもう1ヵ月早く移動して徐々に餌を変える管理にした方がよかったと考えられます。胃の中のルーメン微生物は急に変わった飼料に反応しないため栄養を必要とする時期に栄養吸収できなくなり栄養失調になってしまいます。BVD、ネオスポラ、寄生虫等の原因で流産する病気の可能性もありますが2回流産をしてしまうようならあきらめたほうがよく、3回目を産んでも4回目また流産する可能性があるため2回流産してしまうなら更新することを勧めます。

分娩前繁殖牛管理❷

分娩前の増飼の量は足りているか？

農場主（質問）：分娩前の増飼はCPどれぐらいのものをどれくらい必要になりますか？

佐野（アドバイス）：CP13％程度の繁殖用配合飼料を今までは2～3kgとしていましたが、今は和牛の改良が進んで胎児の体が大きくなっているため3～4kgとしています。分娩前に増飼する配合飼料給与量は3kgでは足りないと地元の繁殖成績の優秀な和牛繁殖農家から逆に言われてしまいます。夏ガスがかかり良質な草が取れなければ5kg程度与えているといいます。太らない繁殖母牛は栄養を胎盤を通して子牛にたくさん与えています。理想はお腹の子牛にとっては粗飼料タンパクが必要なためできれば良質乾草が一番良く、農場で手に入る最も品質の良い乾草をここで与え不足を配合飼料で補うようにしたいです。

分娩前繁殖牛管理のポイント

分娩２ヵ月前の繁殖牛管理が和牛生産で最も重要

- 流産や早産の最も多い原因は母牛の栄養不足。
- 分娩前は母牛の餌の制限や乾草品質を落とす等体重を減量させる管理はしない。
- 分娩前２ヵ月前に別管理をして群で受けるストレス等から早めに解放させる。
- 分娩前の増飼は良質の乾草等出来るだけ品質の良いタンパクを与える。

和牛飼養管理アドバイザーと同行して感じたこと

和牛生産をする飼養管理に対するイメージとして頭に浮かぶことは

「子牛に下痢をさせない。」「繁殖牛を太らせない。」

ということで、これは色々な経験を経て学んだスタンダードな和牛管理方法と言えます。

そのため「子牛へのミルクのやりすぎは注意する」や「繁殖牛には太らないような餌を与える」という管理をする農場は多くなったと思います。釧路管内全体の平均市場成績や繁殖成績を見ても７～８年前と比べ改善されており、和牛の管理は色々と苦労を重ねた結果、あまり余計なエネルギーは与えないように管理することで改善してきたように思います。しかし和牛はここ数年で改良が進み親子ともに必要なエネルギーの量がだんだん増えていることが想定されます。先進地ではそこで飼養管理を一歩先に踏み込んで「子牛を丈夫に大きく育てるための哺乳量アップ」や「繁殖牛の栄養不足を対策して事故を減らし生産性を向上させる」ことに取り組み「子牛に下痢をさせない」「繁殖牛を太らせない」に全集中する管理から更なるステップアップをしているように感じられました。

今までは

「子牛へのミルクの与えすぎは注意する」

「繁殖牛には太らないような餌を与える」

和牛は改良が進み体が大きくなっている

但馬系統の生まれ落ちでも
体重40kgレベル
気高系統でより大きくなった母体…

これからは

「子牛を丈夫に大きく育てるために哺乳量アップ」

「分娩前の繁殖牛は栄養不足の対策をして事故を減らし生産性を向上させる」

勉強と貧困層

勉強は好きですかと問われると多くの方は嫌いと答え、なるべく避けたい対象となっています。こうした勉強嫌いは、皮肉にもそれを教えている学校という場で若い頃に植え付けられるようで、生涯それを引きずることになってしまいがちです。本来の学ぶ楽しみよりも、テストや成績表で劣等感や苦痛ばかり覚えさせられ、特に嫌いな教科となると当時の担当教師の顔まで浮かんでくるので生涯避けたくもなります。

しかし社会に出て数年以内といった若者が、仕事や社会のことがよく分からないまま、決められた時間の中で与えられた仕事をこなし、なおかつ他の社会（業界）をさして覗こうともせず、そのように何年も過ごして世間知らずになってしまうのは避けがたいことです（特にリタイヤした公務員を民間が再雇用するのはごく限られた人数であるという事実がそのことを物語っているかもしれません）。社会に踏み出して間もない若者に限らず、何らかの目標を達成するために自分に投資をした、あるいは自ら定めた期限までに希望をかなえたいなどといった「ここぞという時期」には、〝働き方改革〟などと眠たいことを金科玉条とせず、はっちゃきこいて働くこと・勉強することが必要です。もちろんそれは個人の志（こころざし）にかかることですから、本を読んだり知見を広げるよりも、友達と遊んだり、お酒を飲んだり、スマホをいじっている方がはるかに気楽です。

本当に学ぶことに価値があるのでしょうか？

そこであの有名な「学問のすゝめ」（福沢諭吉著）をちょっとだけ紐解いてみましょう。この本は、今の日本の人口で換算すると1，000万部以上という驚異的なベストセラーです。また2～3年以内には内容とともに消え去ってしまうような昨今のベストセラー本とは異なり、多くの日本人の意識を変え、なおかつ今なお読み継がれる名著となっています。

冒頭はあの有名な「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」です。これだけ読むと人は皆平等である、江戸時代までの身分社会の終わりを告げたとの内容のようですが、実際は「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」となっています。つまり「～と言われています」であって、たしかに人は生まれながらに平等であるけど、実際には貧富の差があり、賢い人とそうでない人がいるといった相違があることに言及しています。その差は、学問をする人としない人との間に生じるものであって、特に潜在能力を持ち、チャンスがあったにもかかわらず、社会や人の役に立とうとしない向上心の低い人を痛烈に批判しています。

「学問のすゝめ」が出版された時代は、明治維新とはなっても単に幕府が倒れただけで、国の体制も財政も非常に不安定な時でした。ヨーロッパ諸国は日本周辺の国々を次々と支配下に置き、日本もいつ植民地となるか分からないといった不安を抱えていました。明治政府の中枢にいたのは、薩長や公家などを中心とするいわば政治素人（しろうと）の集団で、その中には利権や名誉欲に目がくらんだ人もいますが、多くは高い志をもった若者た

ちが新しい日本の礎（いしずえ）を作り上げていきました（志さえない素人政治家の集団が政権を担うと、国民がその大きなツケを払うことになることを、つい最近の日本は経験しましたが…）。

先の見えない時代、特に革命や戦争など社会が大きく変動する時代、国民の意識は非常に高まるようです（実際、科学技術が異常なスピードで進化するのは戦争前や戦時中です）。希望と不安が交錯する時代に生き抜くため、従前の価値観に縛られることなく、日本人に強く自己啓発を促したのが「学問のすゝめ」であったと言えるでしょう。

日本は敗戦後から高度成長時代以降、一度就職したら生涯安泰、給与も職制も年功序列といった安穏とした数十年を過ごしてきました。バブル崩壊で就職氷河期に就活した学生は非常に大変でしたが、それでも正職の座を得たら食べるのに困るといったことは避けて通ることができました。

しかしこうしたモデルが未来永劫続くことは期待できず、結構なスピードで時代の転換期を迎えていることを既に多くの国民が意識しています。今までの様々な価値観が変わり、テクノロジーが生活の隅々まで行き渡り、大多数の人が中流階級で安泰で過ごすことは徐々に難くなり、貧困層がかなりの勢いで増えていくことも予測されています。会社や国に寄生するばかりで、機会があるのに自ら学ばない者は取り残される時代を迎えつつあるのは、ある意味必然です。自分の身は自分で守らなければならない、そのためか能力に応じた的確な評価ができない、中高年の上司が勉強しない、上部組織からの上意下達をしているだけ、副業は認めない、1年前と同じことをなぞる仕事ばかりといった職場では、意識ある人ほど離職していってしまいます。

私たちの身の回りで勉強を邪魔する存在、時間泥棒は何でしょう。

TVのバラエティー番組などはその最たるものですが、幸い番組の制作者側が劣悪化しているので、人々のTV離れは進んでいます。代わって中身のないけどとりあえずは面白いYouTubeやSNSなどは人から何時間でも時間を奪う存在になっています。自分の時間ですから何をしてどう過ごそうと誰からも、とがめられることはありません。自由に過ごせばいいのですが、特に若い時分は時間という資産はなぜか永遠ではないと分かっていても、いくらでもあるように勘違いし、浪費してしまいがちです。人生は短くありません。単に時間を浪費しているだけです（「人生の短さについて」セネカ）。もちろん素晴らしいTV番組や役立つYouTubeも数多くありますから、上手に使いこなせば非常に役に立つツールとなります。

足を運んで勉強する機会をつくることも結構なことです。しかし帯広や札幌に何百人もが参集する酪農の研修会もありますが、その内容の充実ぶりや参加者の多さからかなりの成果が現場にもたらされることが期待されますが、事実はそうでないことが往々にしてあります。その大きなひとつの要因は研修会の参加者の中には、単に勤務時間をつぶしにきているだけという関係者が少なくないからかもしれません。やはり個々の志の問題でしょう。

自ら学び、自ら考える癖をつけ、そして自らアウトプットすることで学問の価値は活かすことができます。誰かが正解を提供してくれるのを待つ、会議に出ても最初から最後まで言葉を発しないのでは、評論家もどきにはなれても学んだことを活かすことできません。間違ってもいいからディスカッションに積極的に参加する若者が成長していくのは当然です。農協連内でも職員同士で自らテーマを決め、ささやかな勉強の真似事をしています。「コロナと日本人」「テクノロジーとは何か」「GISの活用」「マネーリテラシー」「SNSについて」「論語と算盤」「日本の古典芸能」「アンガーマネジメント」などテーマはバラバラですが、地味な積み重ねが小さくても実を結ぶことを期待しつつ…。

うましらべ
～うまの特徴ってなんぞや?～

種馬登録証明書

馬　名

品　種　日本輓系種　性　離　毛　色　鹿毛　生年月日

特　徴　流星鼻梁鼻白・下唇大白・珠目下・波分・沙流上・以下余白

子馬が生まれて、産駒登録を行って、届いた種馬登録証明書をみると特徴という欄によくわからない文字が書かれているのを見たことはありませんか？

漢字ばかりの文章が綴られていますが、これはいったい何なのでしょうか？

馬の登録書に記載されている馬の特徴の内容についていくつか紹介します。

うまの特徴ってどんなもの？

登録書の特徴という欄にはその馬を見分けるための情報が書かれています。

馬は牛とは違い耳標や鼻紋で個体識別をしているわけではありません。毛色や顔の白班、足の白や旋毛で個体を見分けています。もちろん飼養者さんによっては特徴を確認せずとも一目で見分けられる方もいらっしゃると思いますが、第三者から見てどれがどの馬なのか、客観的に見分けられるように馬登録でその馬の特徴を記録し、登録書に記載しているのです。

写真①

では実際に特徴について簡単に説明します。

写真①の馬の特徴は「流星鼻梁鼻白・ 下唇大白・ 珠目下・ 波分長・ 右髪中・ 左芭蕉上・ 沙流上・ 左前半白後二白」となっています。

文字だけでみると何が何だかよくわかりませんが、それぞれ順番に見ていきましょう。

顔の白の特徴「流星鼻梁鼻白・下唇大白」

写真②

写真③

写真②の頭の白い部分を「白班」として採徴します。

「流星鼻梁鼻白・ 下唇大白」…文字だけでみてもよくわかりませんね。

これは顔の白班について、５つに分けて白の有無や大きさや形、位置を言葉で表しています。

５つの部位は上から順に額・鼻梁・鼻・上唇・下唇です。

額の白は星と表現しますがその大きさがこぶしよりも大きい場合は大星、親指の幅よりも狭い場合は小星とします。また白（星）が鼻先に向かって伸びている、流れている場合は読んで字のごとく「流星」として記録します。

鼻梁（びりょう）（鼻筋）や鼻の白の大きさは鼻骨幅よりも大きい場合は鼻梁大白鼻大白、親指幅よりも狭い場合は鼻梁小白鼻小白とします。

写真③のようにこの馬には上唇に白が無く、下唇に大きな白があるため、「下唇大白（かしんだいはく）」と採徴します。

つまり「流星鼻梁鼻白（りゅうせいびりょうびはく）・下唇大白（かしんだいはく）」は「こぶしよりも小さく、親指幅よりも大きい白斑が額から鼻梁、鼻先にかけて途切れずにあり、鼻梁から鼻の白班の大きさは鼻骨幅より狭く、親指幅よりも太い白斑が鼻

梁から鼻にかけてくびれずにあるが上唇には白斑はなく、下唇に鼻骨幅より広く大きな白斑がある」ということを表しています。

文章にするとこんなに長い情報を十数文字で表現し、記録しているのです。

額の旋毛の特徴「珠目下」

写真④

写真⑤

珠目の特徴の前に、「旋毛」について簡単に説明します。

「旋毛」とはずばりそのまま「つむじ」の事です。写真④⑤のように毛が渦のように集まっている場所で、馬の登録では「せんもう」と読みます。

登録では馬の旋毛の場所を特徴として記録します。審査員が目を凝らして子馬の周りをぐるぐる回っているのは旋毛の有無を確認しているためです。

写真⑥

顔には白斑の他にも採徴する特徴があります。その中で額にある旋毛は「珠目（しゅもく）」として採徴します。

珠目は額にある旋毛でその位置、個数によって表記が変わります。

目の上下幅の間に珠目がある場合は「正」それよりも上の位置にある場合は「上」、下にある場合は「下」として採徴します。また珠目が２つある馬は「珠目二」とその数を記載します。

こちらの馬は目よりも下の位置に珠目があるため、「珠目下（しゅもくげ）」となります。

旋毛の特徴「波分長」「右髪中」

写真⑦

写真⑧

馬の体には旋毛が額以外にも複数あります。（旋毛がない馬もいますがそれも特徴です）

旋毛は馬体の場所ごとに名称が決まっています。

馬の個体識別をするために確認する旋毛のカ所はいくつもありますが、こちらの馬は首の下の位置（写真⑦）に「波分」と呼ばれる旋毛があります。波分は毛の流れに影響を与えている「寄り」と呼ばれる部分の長さが10cm以上あると「波分長（なみわけちょう）」という表現になります。

この馬は波分があり、寄りの長さが10cm以上あるので「波分長」と採徴します。

さらにこの馬の右のたてがみをかき分けると少し見ずらいのですが写真⑧の矢印に「髪中」と呼ばれる位置に旋毛がありました。左側の髪中には旋毛は無かったので、「右髪中（みぎかみなか）」と採徴します。

写真⑨

足の白の特徴「左前半白後二白」

写真⑨のように足の先が白くなっている場合も採徴します。

４本の脚のどの足がどれくらいの面積で白いのかによって表記が変わります。

例えば足が蹄冠部より菅の半分以上までぐるっと一周まわって白い場合は「長白（ちょうはく）」

半分以上白くても一周ではなく半周だけ白い場合は「長半白（ちょうはんはく）」

ぐるっと一周白くても一部だけが管の半分以上まで伸びている場合は「細長白」とそれぞれ長さ、どこからどこまでが白いのかによって変わります。

こちらの馬は、左前足が管の半分以下で半周だけ白く、左右の後ろ足が管の半分以下でぐるっと一周白いので「左前半白後二白」となります。

毛色の特徴「鹿毛」

馬の毛色も重要な識別情報です。

主に体毛（被毛）の毛色、たてがみの毛色と尾っぽ（長毛）の毛色、足先の毛色でその馬の毛色を判断します。

写真①の馬は「鹿毛」です。

鹿毛は体が茶色（明るい赤褐色～暗い赤褐色）でたてがみと尾と肢が黒いものが鹿毛に分類されます。

鹿毛でもその被毛の色合いや部位の色で「黒鹿毛」や「青鹿毛」という毛色になる馬もいます。

毛色が変わる要注意の毛色

写真⑩

毛色の中には成長していくにつれて色が変わるものがあります。それが芦毛です。

芦毛は生まれたときは白くない毛色ですが、成長していくにつれて白く変わっていきます。（中には真っ白にならずに微妙に白っぽい毛色の芦毛もいますが…）

見極め方としては１つ目に親の毛色があります。芦毛は親馬のどちらか一方、もしくは両親ともに芦毛でなければ子馬も芦毛にはなりません。（芦毛の法則）

そのため、両親のどちらかが芦毛の場合には毛色が変わる可能性があり、変わった際には登録書の確認が必要です。

２つ目は瞼です。芦毛になる馬の瞼には白い毛が混じっています。これは「将来白くなるよ」という兆候です。

写真⑪の馬のようにわかりやすく白くなっていればよいのですが、中には本当に瞼に数本白い毛があるだけで将来芦毛になる馬もいるため、慎重に確認します。

写真⑪

今回は馬の特徴について、簡単に説明しました。

数文字の漢字の中に含まれる情報量は意外にも多いと感じたのではないでしょうか。

採徴は登録書を作るための非常に重要な業務です。より安全に、より正確に採徴ができるよう産駒登録の際には母馬だけでも保定して頂けると子馬が良く見れて、確実性の高い登録作業がスムーズに行えますので、お忙しいとは思いますが、ご協力お願い致します。

※写真④⑤⑩⑪提供：公益社団法人日本馬事協会

市場平均価格の推移

乳牛市場 釧路市場

初生乳用交雑種（F1） 釧路市場

黒毛和種 十勝市場

重種馬 釧路市場

釧路管内の歴史を巡る旅

釧路管内におけるSLの歴史

Vol.8

SLの歴史
＜中編＞

シリーズ企画として連載している釧路管内の歴史探訪。

前回は釧路駅から標茶駅までの間を期間限定で運行している「SL冬の湿原号」の乗車レポートを掲載しましたが、今回は三部作の中編と題し、北海道内において唯一現役で走行しているこのSLが釧路駅に復活するまでの歴史をご紹介します。

※内容に関しては諸説ありますのであくまで筆者の見解も含む点、ご了承願います。

蒸気機関車の夜明け

日本国内におけるSL機関車の導入は安政元年で、当時、通商を求めて来日したアメリカ艦隊の提督ペリーから将軍に献上された模型の蒸気機関車と貨車を横浜の海岸で試運転したことがその創始といわれています。

北海道に初めてSL機関車が導入されたのは明治13年で、「手宮（小樽市）～札幌」間35.2kmが道内における鉄道発祥の地とされ、さらにその7年後の明治20年、道東地方で初めてSL鉄道が開業されました。それは弟子屈町川湯のアトサヌプリ（硫黄山）から産出される硫黄の運搬のため「標茶～跡佐登」間38.6kmに敷設された専用鉄道でした。この鉄道は、北海道で2番目に敷設された鉄路で、ルートや仕様、部材などを検証すると当時においてかなり画期的なものだったと推察できるそうです。

現在は川湯温泉の源として有名な硫黄山ですが、明治初期から昭和30年代にかけては、硫黄を採掘する鉱山として利用されていました。当時、硫黄はマッチや火薬の原料として需要が高まっていた鉱物で、近隣では雌阿寒岳や知床硫黄山でも採掘が行われていました。この硫黄採掘によって、ほぼ未開の地であった弟子屈・釧路を含めた道東の産業が急速に発展していったのです。

特にアトサヌプリは硫黄の含有量の多さと質の良さから道内屈指の生産高を誇っていましたが、釧路までの搬出が困難であったことなどからのちに経営に窮し、何度か経営者が入れ替わり最終的には銀行家である安田善次郎の手に渡りました。この安田善次郎とは安田財閥の創始者であり、弟子屈や釧路を中心とした道東の近代化を一気に進めた人物です。

安田は専用鉄道を明治24年に「釧路鉄道」という私鉄として国の認可を受け、一般貨物及び旅客輸送の営業を開始し、1日4往復の列車を運行させました。

ところが、開業から僅か5年後の明治29年、硫黄鉱山が資源枯渇のため閉山してしまい、それに伴い釧路鉄道も営業を休止し、安田はその翌年、私鉄経営を廃止させてしまいました。

しかし釧路鉄道の廃止と同年の明治29年は、北海道鉄道敷設法が公布され、道東・道北地方の鉄道網の整備・敷設計画が積極的に進められた年でした。これにより道東地方では、明治34年の官設鉄道釧路線「白糠～釧路」間の開業を皮切りに、同38年「帯広～釧路」間全通、大正6年「釧路～厚岸」間開業、同10年根室まで全通というように、着々と新線が開通していきました。

鉄道の開通が、釧路の市街地発展に大きな影響を与えたのはいうまでもありません。

明治期に造られた最初の釧路駅があった場所は、現在、釧路農業会館に隣接している幸町公園の敷地内です。この立地の意義を紐解くと、元々釧路市は、最初に開かれた頃は南埠頭周辺（現在の南大通や米町付近）がその中心地でありました。それは釧路川より西側の平坦地は、釧路湿原へ続く湿地帯が広がり、洪水の危険などから未開拓地が多かったことが理由ですが、釧路駅がそんな釧路川より西側の地区である現在の幸町で開業したことは、当然市街地の西への拡大を促したとされています。もっとも、この頃の釧路の人口はやっと一万人を超えたばかりで、道東一の都市といえどもまだまだ小さな町でした。

釧路川と湿原の中を走るSL

資材運搬から旅客へとその営業スタイルを変貌したSL機関車は技術の発展とともに次々に進化を遂げ、日常生活に欠かすことのできない「日本人の足」となるわけですが、戦後しばらくすると、当時の国鉄はさらなるエネルギー革命とともに鉄道の「無煙化」を進めました。すなわちそれは蒸気を発するSL機関車の終焉を意味するものでした。

そして、北海道で最後のSL機関車が役目を終えて引退したのが昭和45年のことです。

ここから現在のいわゆる「電車」へと鉄路は発展していくことになるのですが、その一方でSLに対する名残り惜しさを感じる人も多く、日本各地で引退したSLの「静態保存」がブームとなりました。

前記した初代釧路駅跡地である現在の幸町公園内にも蒸気機関車『C58―106号機』が静態保存されています。〝シゴハチ〟の愛称で親しまれたこのSLは、昭和18年釧路機関区に配置され、釧網本線等で活躍しました。時に昭和29年8月、天皇・皇后行幸啓の際には、お召列車をけん引した由緒あるSLとされ、引退後、昭和47年に鉄道100年記念として当地に保存されることとなりました。なお、幸町公園では大正5年に北海道内の鉄道線路の延長が千マイルに達したことを記念して建てられた写真の記念碑も見ることができます。

幸町公園内の北海道鉄道記念塔

幸町公園内に静態保存されているSL“シゴハチ”

そんな折、静態保存ブームだけでは満足できない一部の鉄道ファンからは〝走るSL〟の復活を望む声が上がり始めました。そこから、釧路駅におけるSL復活に向けたプロジェクト計画がスタートするわけですが、静態保存ブームが功を奏し、全国各地に散らばったSLの所在地はある程度把握できていたため、各地を探し回った結果、状態として最も良好だったのがなんと管内の標茶町桜町児童公園で約20年間、静態保存されていた『C11―171号機』でした。復活の白羽の矢が立った当機は、平成10～11年に修理・整備を重ね、その後「SL 冬の湿原号」と名付けられ、平成12年、釧路駅に帰還したのでした。

静態保存されていた標茶に里帰りをはたしたSLはどこか誇らしげで地元住民のみならず多くの鉄道ファンを魅了する冬の観光名物として今も元気に汽笛を鳴り響かせています。

参考文献
新井健一郎 著
『釧路路
～ひがし北海道鉄道のすがた～』
藤　泰人 著
『SLが輝いた日々
～釧網本線1969-1973～』

お知らせ

なお、前回のSL乗車体験記の模様は、本会YouTubeチャンネルにおいて動画を公開しておりますので興味のある方はこちらのQRコードからご覧ください♪

釧路農協連通信 No.65 2021年9月号
発行所/釧路農業協同組合連合会

釧路市黒金町12丁目10番地1
TEL0154-23-1131 FAX0154-23-1126
ホームページ http://946nokyoren.or.jp

■発行人 代表理事会長 野村 宏
■編集者 参 事 加藤 勝幸
■発行日 令和3年9月15日
■印 刷 雨宮印刷株式会社

釧路農協連 Instagram

コロナ禍でなかなか外出が出来ない今だからこそ、たくさんの情報を発信し、釧路農協連のインスタを通じて少しでも皆さんに元気を届けられたら嬉しいです♪
写真の提供も引き続きお待ちしております♪

KUSHIRONOKYOREN

フォロー方法

インスタのアプリをお持ちの方は、「釧路農協連」で検索！
または、アプリを開いて左図のQRコードをスキャン！！
※スキャン方法は下記参照

SNSで釧路・酪農の魅力をたくさん発信中!!

釧路農協連 You Tube

馬事の歴史について深掘り!

釧路の馬産に詳しい方にもお話を伺うことが出来ました♪

乗用馬市場に潜入!

障害物を軽〜く飛び越える姿に釘付けです！
そしてセリ人は本会課長！
セリの様子もご覧ください♪

馬にも出生届があるんです!

子馬に作業着を食べられながらも必死に採徴する姿をご覧ください★

他にも動画がアップされているのでぜひご覧ください。
YouTubeで「釧路農協連」と検索または吹き出し内のQRコードからチェックしてください♪
高評価&チャンネル登録宜しくお願い致します!!

YouTube 釧路農協連

釧路農協連【公式】チャンネル
チャンネル登録者数 153人